2025/2/16

ルカの福音書　講解メッセージ㊹

『ルカの福音書 18 章 31-43 節　幼子の信仰』

■十字架の意味――影から本体へ

> 「さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。」（ルカ 18:31）

イエス様がご自身を「人の子」と呼ばれたのは、当時の人々が救い主を指す言葉として知っていたからです。神が人となって来られ、私たちを救ってくださる方――それがイエス・キリストです。

旧約聖書には救い主に関する数多くの預言があり、その預言の成就のため、イエス様はエルサレムへ向かわれました。こうしてイエス様は捕らえられ、裁かれ、蔑まれ、十字架につけられ、そして、三日目によみがえられます。これらすべてが、預言者たちが語っていたことでした。

> 「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（イザヤ 53:1-5）

イザヤ 53 章は、今の私たちから見ると明らかにイエス様を指しているとわかりますが、当時の人々には理解できませんでした。救い主を待ち望んでいたにもかかわらず、それがイエス様であると気づいた人は、ごくわずかの人々でした。

イエス様は王家ではなく大工の家に生まれ、特別な肩書きもありませんでした。神は人の評価ではなく、ご自身の働きによって真実を示されるからです。そして、ガリラヤで慕われていたイエス様は、預言の通り、エルサレムでは拒絶され、蔑まれ、苦しみを受けます。

しかし、預言はそれだけではなく、十字架の本質をも示しています。人々はイエス様が罰を受けていると思いましたが、そうではないということです。イエス様が背負われた「病」とは「罪」のことです。罪とは、神が見えない状態、神と分離した状態を指します。イエス様は罰を受けたのではなく、私たちの罪――神が見えない不安や孤独――を背負って、十字架に架かられたのです。

> 「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」（ローマ 6:23）

聖書は「罪とは、死の報いである」と教えています。死とは神と人を引き離す力のことで、アダムとエバが罪を犯した瞬間、人類に死が入り込みました。その結果、人は神が見えなくなり、「不安」を覚えるようになったのです。すべての不安の原因、それは「神に愛されている自分を確認できないこと」に起因しているのです。

神は私たちを絶えず支え、愛しておられます。人は本来、その愛を知っていました。しかし、神が見えなくなり、その愛がわからなくなってしまったため、人は楽しさ、成功、比較、称賛など「見える安心」を求めるようになりました。そのため、比較が生まれ、妬みや争いが生まれ、それが憎しみとなり、殺人や戦争にまで発展するのです。つまり、「神の愛が見えない」という罪の状態が、罪の行為を生むのです。

> 「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）
>
> 「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」
>
> （Ⅰヨハネ 4:9）

そこで神は人となって来られ、十字架にかかられました。イエス様は私たちの罪を背負い、「神に愛されている自分が見えない」という状態を引き受けられました。十

字架は、「どれだけ私はあなたを愛しているか。」と、神が私たちにご自身の愛を見せてくださった答えなのです。

十字架を通して神は「あなたを愛している」ということを見える形にされました。愛が見えると不安が少しずつ消え、罪の行為も減っていきます。心が癒されていくのです。

聖書の中で、「罪」と「病気」は同義で扱われています。罪とは「神が見えない」という病であり、イエス様はその病を背負われました。それで、「彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（イザヤ 53:5）と記されているのです。

「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」

（イザヤ 53:6-12）

神が見えなくなり、神に愛されていることが分からなくなった結果、私たちはそれぞれ自分勝手な道を歩むようになりました。人によって安心を求める対象は違いますが、誰もが「見える安心」を探してさまよっています。その原因である「神の愛が見えない」という状態を、すべてイエス様が負ってくださったのです。

イエス様は迫害と苦しみを受けながらも、口を開かずに耐えられました。その理由はただ一つ、「どれほどあなたを愛しているか」を示すためでした。人々は自分が愛

されていることを知らないために、間違った道を好き勝手に歩いています。その人々に向かって、「私を見なさい。私はあなたを真剣に愛している」とイエス様は語っておられるのです。それによって私たちを癒すためです。

「彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする」とは、キリストが私たちの罪のためにご自身を捧げられたということです。つまり「あなたを愛している」ということを示すために、いけにえとなられたのです。イエス様が私たちの咎を担われたことで、私たちは「義」とされます。赦され、不安が取り除かれていきます。

イエス様が負われたのは「罰」ではなく「罪」です。聖書はどこにも「罰を背負った」とは書いていません。神は私たちを罰したいのではなく、助けたいのです。癒したいのです。

私たちは今、聖書を通してその愛を知ることができます。十字架を通して「愛されている自分」が見えるようになると、不安が少しずつ癒され、罪の行為も減っていきます。イザヤ 53 章には、この深い真理が記されています。

さらに、イザヤ書は、キリストの復活について、次のように預言しています。

> 「あなたの死人は生き返り、私のなきがらはよみがえります。さめよ、喜び歌え。ちりに住む者よ。あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。」
> （イザヤ 26:19）

旧約聖書の復活の預言は、イザヤ書が最も詳しく記されていますが、その他に、ダニエル書には終わりの日の預言が、エレミヤ書にもキリストを指し示す預言があります。イエス様は、これらの預言が成就するためにエルサレムへ向かわれました。

> 「人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」（ルカ 18:32-33）

これはイザヤ書の復活の預言とつながる言葉です。イザヤ書では時期は示されていませんでしたが、イエス様は「三日目によみがえる」と明確に宣言されました。旧約の預言がここで成就へと向かいます。

このことから、聖書全体の構図が見えてきます。旧約聖書に記されている出来事や預言は、本体であるキリストを指し示す影であり、その本体を明らかにしているのが

新約聖書です。

ですから旧約は新約の光を通して読む必要があります。旧約だけを読むと解釈がばらついてしまうため、必ず新約と結びつけて読むことが大切なのです。

> 「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。」
>
> （コロサイ 2:16-17）

本体であるキリストに目を向けずに、旧約聖書だけを読むと、「してはいけない」「できないと悪い」という律法主義になってしまいます。しかし旧約はキリストを指し示す影であり、本体はキリストです。キリストの教えと結びつけて読むと、旧約の意味が正しく見えてきます。

キリストは罪を赦すために来られました。ですから自分の弱さや罪を知る必要があります。その役割を果たすのが旧約の律法です。しかし、いつまでも律法だけを見続けるのは間違いです。本体はキリストであり、旧約はキリストへ導くための影なのです。

> 「あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」（コロサイ 2:18-19）

ここで言われている「かしら」とはキリストのことです。本体であるキリストに結びつかない人は、自己卑下をしたり、自分をよく見せようとしたり、宗教的な行為を積み上げて「私は立派だ」と誇ろうとするということです。しかしそれは「肉の思いによる誇り」であって、神の力を受け取ることはできません。では、どうすればキリストに結びつくことができるのでしょうか。その鍵は「生き方の違い」にあります。

一つ目は、「人との関わりの中で自分を知ろうとする生き方」です。それは、人と比べることで自分の価値を測る生き方のことで、人よりできていれば安心し、できなければ不安になります。律法を守ることで、「私はこれだけできる」と誇ります。イエス様が語られたパリサイ人のように、「自分はできる、あの人はできない。だから

私はましだ」と考えてしまうのです。しかしこの生き方は必ず裁き合いを生みます。比較の世界に生きる限り、心は安息を得られません。

> 「ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行っているからです。」（ローマ 2:1）

もう一つの生き方は、「神との関わりの中で自分を知ろうとする生き方」です。

神と向き合うと、自分の弱さや無力さが見えてきます。神の前では何も誇れません。しかし、この「無力さを知る」ことこそが真実の姿です。今はできていると思っていることでも、人は必ずできない時が来ます。終わりが真実であるなら、「できない自分」こそ本当の姿です。だから「私は神の前では何もできません」と知る人は幸いなのです。聖書はその人を勝利者と呼びます。なぜなら、自分が無力であると知ったとき、神の力がその人に働くからです。自分の力で生きようとする限り、神の力が働く余地はありません。しかし「私は何もできません」とへりくだり、神に委ねるなら、神の力が流れ込み、神がその人に代わって生きてくださいます。

> 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」（ガラテヤ 2:20）

この「無であること」が、キリストと結びつく鍵です。赤ちゃんが何もできないからこそ、親の力がその中に働くように、私たちが「何もできない者」であることを認めるとき、神の力が働きます。これが勝利者の生き方です。

人との比較の中で自分を知ろうとするのは、敗北者の生き方です。人からどう思われるかが気になり、比較の世界に生きるため、神の力が働きません。喜びは「人からよく思われること」だけですが、それは消えていくものです。

勝利者の生き方とは、神の力によって生きる人です。神と結びつき、神の力が内側に働く人です。そこには本当の安息と平安があります。

旧約聖書だけを読むと、律法主義になりやすく、キリストと結びつく生き方から外れてしまう危険性があると聖書は警告しています。律法は自分の弱さを知るための道具であり、助けてくださる本体はキリストです。旧約と新約はそのような関係にある

のです。大切なのは、キリストと固く結びつくことです。そうすれば、神の力によって私たちは成長させられます。

「このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。」（コロサイ 2:19）

■信仰とは何か

「しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。」（ルカ 18:34）

イエス様がご自分について、「私はこれから鞭打たれ、馬鹿にされ、殺される。しかし三日目によみがえる」と語られたとき、弟子たちはその意味を全く理解できませんでした。これは初めて聞かされる話ではなく、イエス様は他の場面でも同じことを語っておられますが、弟子たちは理解できなかったのです。

ここで大切なのは、「神を理解するのは肉ではなく信仰である」ということです。神様は“理解する対象”ではなく、“信じる対象”なのです。

神を「肉」で理解しようとすると、必ず行き詰まります。三位一体の真理を、頭で理解しようとした結果、いくつもの異端が生まれました。聖書は「理解するもの」ではなく「信じるもの」なのです。「聖書にそう書いてあるから信じます」、この姿勢が信仰です。

弟子たちは信仰ではなく、肉で理解しようとしたため、イエス様の言葉につまずきました。しかし信仰で受け取る人はつまずきません。

弟子たちがイエス様を裏切ることになったのも、信仰ではなく、肉で捉えようとしたからです。イエス様は、彼らが理解できなかったことを踏まえて、次の出来事を通して、信仰とは何かを示されました。

「イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、彼は大声で、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と言った。」

（ルカ 18:35-38）

この町にも、困っている人が他にもいたはずです。しかし、叫んだのはこの盲人だけでした。彼が叫んだ理由は、彼が「闇」を知っていたからです。闇を知る者だけが光を求め、苦しみを知る者だけが喜びを求め、痛みを覚える者だけが医者を求めます。

当時、人々は苦しみを罰だと考えていました。しかしイエス様は、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。(ヨハネ 9:3)」と語られました。人々は称賛や成功を祝福だと思いますが、聖書は、苦しみは神の栄光が現れる場所であり、祝福だと教えています。なぜなら、苦しみが人に光を求めさせるからです。苦しい時、人は真剣に祈ります。だから苦しみに出会うことは感謝なのです。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」(詩篇 119:71)

苦しみは信仰と同じく神からの賜物です。この盲人が叫ぶことができたのは、苦しみを覚えていたからです。

神は永遠性であり、私たちは有限性です。有限の私たちが永遠の神と関わろうとすると、必ず「ずれ」が生じます。このずれこそが苦しみです。つまり苦しみとは、あなたが神を求めていることの表れなのです。必死に求めているからこそ、現実に神が見えないことに苦しむのです。神は、あなたが神を呼び求めることを待っておられます。ですから、苦しみは、神があなたを呼んでおられる呼び声とも言えます。

「彼を黙らせようとして、先頭にいた人々がたしなめたが、盲人は、ますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫び立てた。イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。彼が近寄って来たので、「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねられると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです」と言った。」(ルカ 18:39-41)

人々は盲人をたしなめましが、彼はあきらめず、ますます叫び続けました。信仰とは、あきらめないことです。彼があきらめなかったのは、本当に苦しかったからです。本当に苦しい人は、真剣に神と向き合い、祈り続けることができます。

このときイエス様は、「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねておられます。イエス様は神ですから、盲人が何を望んでいるかをご存じでした。しかし、あえて尋ねられたのは、「口で告白すること」が信仰にとって極めて重要だからです。心の中で思

っているだけでは信仰は本物になりません。口で告白したとき、逃げ道がなくなり、覚悟が生まれます。

「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」(ローマ 10:10)

盲人は皆の前で「目が見えるようになりたい」と告白しました。大きな勇気が必要でしたが、この告白によって彼の信仰は本物になりました。すると、イエス様は次のように言われました。

「イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです」と言われると、彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。」(ルカ 18:42-43)

この時点ではまだ見えていません。しかしイエス様は「救われた」と宣言し、その直後、彼は見えるようになりました。ここが信仰の第三のポイントです。信仰とは「先取り」です。まだ見えていなくても、神の言葉を結果として受け取ることです。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」(ヘブル 11:1)

祈りとは、問題の解決を求めるだけのものではありません。私たちが祈るとき、神は二つの働きを同時に行っています。見える問題の解決と同時に、神との関係を深めることが進められているのです。

見える問題は、解決する場合もあれば、解決しない場合もあります。しかしどちらであっても、神は必ず「本当の答え」をくださいます。それは「神を信頼する心」です。見える結果が出なくても、「神は必ず助けてくださる」という確信が与えられます。これが信仰の答えです。

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」(ヘブル 11:13)

見える結果が手に入らなくても、信仰の人は「はるかにそれを見て喜ぶ」のです。

神との関係が深まるからです。

パウロも同じことを教えています。彼は病のいやしを求めて三度祈りましたが、いやされませんでした。しかし、この病気を通して自分の弱さと向き合うことを神によって教えられました。

> 「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」（Ⅱコリント 12:9）

弱さを誇る――これこそが勝利者の姿です。弱さの中に神の力が働くからです。

ですから、神に祈って願った通りのものを得られなかったからといって、そこで祈ることをやめてはいけません。祈り続けるなら、神は必ず答えを教えてくださいます。それは、神との関係を築き、神を信頼できるようになり、真の安息を得られるようになるということです。これこそが、神があなたに教えたい答えなのです。

見える困難が解決しても、それは永遠に残るものではなく、一時的なものです。しかし、神との関係はいつまでも続きます。

大切なことは、キリストと深く結びつくということです。人との関係の中で神を知ろうとするのではなく、神との関係の中で自分を知ろうとすることです。そのための入り口が苦しみです。苦しみを通して、あきらめずに祈ることを学び、神に結びつき、「安息」「平安」という、本当の答えを手にして生きていきましょう。